

幼稚園教諭のストレス要因に関する 日中比較分析

褚 蓄*・田中 理絵

Comparative Study between Japan and China of Stress Factors in Kindergarten Teachers

CHU Lei*, TANAKA Rie

(Received September 27, 2019)

1. 問題の背景と本研究の目的

近年、女性の社会的地位の向上や社会進出の増加により、共働き家庭が増えてきた。また、少子化対策のひとつとして子育て費用の負担や教育費負担を減らすために、日本では2019年10月から幼児教育無償化の実施が始まった。しかし、保育者不足という緊急課題は提出されてから時間がたつものの、未だに解決されていない。「教育無償化より、保育者の待遇や仕事環境を先に改善すべき」¹という現場の声が聞こえる。また、子育て家庭を取り巻く環境の変化や保育ニーズの変化により、幼稚園の機能拡大が要求されるようになってきた。現在の幼稚園は、教育という基本的な機能以外に、子どもの社会性を育む機能、ピアノ・英語・スポーツなどを習わせる機能、保護者の育児不安や悩みの相談を受ける機能、保護者同士のコミュニケーションを図る機能、地域社会と結びつき、幼保小連携などの機能を備えるようになってきている(金城 2017)。

ところが一方で、「幼稚園の機能拡大は重要なのはわかるが、現場の先生は重労働である」と幼稚園教育専門部会²で指摘されたように、機能拡充を支えるシステムの不足が問題にもなっている。現代の幼稚園教諭は、多様な個性をもつ子どもたちを育てながら、保護者や同僚などと人間関係を築くことに力を入れ、様々な教育・保育活動に努力して、また仕事量の多さからくる残業や仕事の持ち帰りなど、それらによって日々の生活の中で不快と疲れを蓄積し、ストレスを抱えるリスクに晒されている。その結果、教員は心身障害に陥る危険だけでなく、仕事満足感と幸福感を失い教育・保育への意欲を失う可能性もある。また、人間関係や必要のない仕事に煩わされて、子どものことだけを考えることができなくな

り、適切な教育・保育活動が妨げられる事態も予想される。したがって、いかにストレス要因を除き、解消するのかが課題となる。

ところで、保育者の心身の健康に関する研究は1970年代から始まり、1980年代までは身体的健康を中心として保育者の頸肩腕障害・腰痛は他の業者より特徴的であると明らかにされてきた。それ以降、精神的健康に関する研究は多数蓄積され、ストレスやバーンアウト、保育効力感など様々な視点で報告されてきた。たとえば、ストレス要因の研究について、村田(1996)は人間関係での不快の経験、子どもに対する負のイメージ、保育指導技術の不安、無力体験、積極的対処行動傾向、仕事への志気、情緒的支援、仕事に対する周りからの支援の8つ要因尺度を用いて分析した。また加藤・安藤(2015)は、職場環境、保育環境を取り上げている。宇佐美ら(2015)は、責任・仕事量の多さ、人間関係、能力の未開発、役割・裁量権の不明瞭さ、問題を共有し相談できる支援体制の不備を指摘している。さらに、上村(2012)は複数担任制からくる職務内容の曖昧さがストレスになることを指摘した。

日本と同じく、中国でも教員のストレスに関する研究は多数蓄積されており、教員の仕事環境の改善を図り、教員不足という課題の解決が求められている。しかし両国とも、教員のストレス要因に関する比較研究の視点は乏しく、自国の検討で終わっている。他の国との比較から、自国の現状および課題がより明確になることから、本研究では日本と中国における幼稚園教諭のストレス要因の比較を行うことにより、その特性を明らかにするとともにストレス軽減やシステム改革への示唆を得ることを目的とする。

* 山口大学大学院教育学研究科

ところで、ストレスに関する概念は様々あるが、本稿では、仕事において精神的・肉体的な圧力を受けていると本人が自覚していることを指す。前述のように、ストレスの高い職場環境は心身の健康を害する要因のひとつであり、仕事への意欲にマイナスな影響を与えて適切な教育・保育活動を阻害する可能性がある。つまり、意欲の喪失により、教育活動の中で子どもの欲求を無視したり子どもも放置をするなどの事態が発生しやすく、また、虐待的・不適切な保育行為が発生する可能性につながると考えられる。子どもは大人に比べて心身共に弱いため、権利侵害や虐待などの課題に直面しやすい。

しかし、日本では、児童虐待に関する研究は家庭内の範囲に限定され、保育施設でも虐待が行われる点についてはあまり議論されてこなかった。2019年、福岡県、熊本県、下関市において保育施設での子ども虐待事件が次々に報道された際には社会の関心を集めたが、今後、幼稚園や保育所などの保育施設における児童虐待防止に向けて、さらに検討が必要になっていくだろう。

一方、中国では、2017年の保育施設における虐待事件の多発により、民衆の関心が高まって、教育学、心理学、法律学などの分野で積極的に検証がなされている。陳・熊（2019）は、2011-2017年末までの保育施設での虐待事件を分析して、教諭の虐待行為を内在的な欲望の外在的表現として扱っている。詳しく言えば、二つのタイプに分けられ、一つは頭に来て衝動的に行った行為である。日ごろのストレスや仕事の不満という内在的な欲望を持ち、子どもが泣いたり騒がしかったり言うこと聞かない場合、衝動的に暴力や暴言として表出してしまう。もう一つは、ストレスの解消、仕事でのよい評価を追求するために、子どもを無理やり押し付けて自分の欲望を満たすタイプである。どちらもストレスと虐待の関連性を示唆しているが、事件数の分析によって結論まで導くのは不確実であり、さらなる検討が必要であろう。

したがって、本稿は「幼稚園における児童虐待・不適切な養育の防止」に関する研究の一環として、日中における幼稚園教諭のストレス要因を比較・分析することによって、①ストレスは保育者の虐待的な養育態度に関係があるかどうかを検証し、②ストレス要因の区別を明らかにするとともに、教諭のストレス解消への示唆を得ることを求めて、子ども虐待発生リスクを下げることを課題とする。また、保育施設の複雑性と調査の可能性を考え、研究対象は幼稚園（認定こども園を含む）の教諭に限定した。

2. 研究方法

2.1 調査手続き

2019年5月～7月にかけて、日本全国の60幼稚園の園

長先生に調査協力を依頼したところ、16園から承諾を得ることができた（留置・郵送調査）。それと並行して、中国では幼稚園10カ所に調査協力を依頼し、承諾を得た後に訪問の形で調査を行った。両国とも、調査票（日本語版・中国語版）は園を通じて教諭に配布され、記入後、回答者自身が封印した封筒を園に提出してもらい、まとめて回収する方法をとった。調査用紙には、調査目的と、無記名・個人情報の保護、回答したくない質問は飛ばしてよい旨を明記した。

なお、中国では、web調査も一部実施している。ネット回答は、アンケート大手ウェブ「問巻星」を使って、質問紙調査と同様に、調査目的や個人情報の取り扱いなどについて明記した。項目はすべて同じである。

2.2 調査協力者

日本調査は、北海道から千葉県、香川県、三重県、広島県や山口県など13都道府県の16幼稚園の協力が得られ、345票を回収した（回収率は91.1%）。回答者の内訳は、男性9人、女性336人であった。

中国での調査は、S県のZ市とI市の10幼稚園を対象に180票を配布し、153票の回収があった。また、ネット回収は21県をカバーしており、62票を回収した。未記入を除いた回収率は88%であり、その内訳は男性29人、女性184人であった。中国のS県は、2019前半年のGDPは4億元、全国3位である。Z市とI市は全国の663市のうち90-100位であって、やや上位の城市を代表できると考える。

2.3 調査内容

質問紙は先行研究を参照しつつ、「不適切な養育」に導く可能性のある要素を想定して作成した。全体の質問内容は以下の通りである。

- ・対象の属性に関する項目（性別や年齢など）
- ・仕事環境に関する項目（人間関係や保育連携など）
- ・仕事に対する満足感（達成感、幸福感など）
- ・園の設置と方針に対する考え（健康診断や心理検査、監視カメラの有無）
- ・保育方法に対する考え（虐待的・不適切な養育態度の場面を想定）
- ・自由記述（幼稚園の課題や不足に関する感想）

以上の質問項目について、本研究ではSPSS statistics 23.0を用いて分析を行う。

3 調査概要と先行研究

3.1 対象者の属性

本調査では、日本の幼稚園教諭の学歴は、高卒7人（2%）、短大卒244人（71%）、大卒及び大学院修了者が93人（27%）であった。基本的に短大卒及び大卒以上である。一方、中国では、中卒が23人（11%）を占め、

高卒は30人（14.3%）、短大卒94人（44.7%）、大卒及び大学院修了は63人（30%）と、学歴の差は日本より大きい。なお、日本の場合、免許を持たない教諭は13人だけで全体の3.8%であったが、中国は74人で全体の34.7%を占めており、免許を持たない教諭の割合は日本よりかなり高い。また、日本の教諭のなかで、ストレスは「よくある」「時々ある」と答えたストレス自覚者は全体の81.5%（279人）であり、中国でも全体の79.4%（169人）と、両国の幼稚園教諭とも高ストレスの職場環境で働いていることがわかった。

3.2 幼稚園教諭のストレスに関する先行研究

本稿では、幼稚園教諭のストレス環境を分析対象とするため、教諭のストレス要因に関する先行研究を分析・検討したところ、日中教諭のストレスを表1のように整理することができた。

表1 先行研究によるストレス要因

日本のストレス要因	中国のストレス要因
事務作業・仕事量の多さ 残業による時間確保の難しさ 給料待遇、職場環境の不満 保護者、児童への対応の複雑さ 人間関係上の不満 日常事情（個人生活）	事務作業・仕事量の多さ 残業による時間確保の難しさ 給料待遇、職場環境の不満 保護者、児童への対応によるストレス 人間関係 日常事情
-----	-----
・園の方針とのズレ ・知識と現場のギャップ（新人保育者） ・能力の未開発 ・社会的地位の低さ ・周り（社会）からの支援不足	・職務評価 ・仕事能力や個人価値の職業希望（job expectancy） ・社会地位や世間からの偏見 ・仕事と家庭の両立（自身の家族からの支援不足）

仕事量の多さや残業、給料待遇や職場環境、保護者・児童への対応、人間関係、日常事情などの項目で共通点が見られるが、その一方で、日本・中国とも独特のストレス要因が存在していることがわかる（表1破線以下）。

まず、中国では「職務評価（園の方針とも言える）」が目立つ。中国では、仕事の評価と給料・賞与が強く関連付けられることから、高評価の追求にストレスを感じることも多い。一方、日本は、「園の方針とのズレ」がストレスと関連し、一部の規則を受け入れられない点が目立つ。本調査の自由回答でも「園長の考えや方針により、同じ事案であっても対応や対処の違いがあり…すべて園長に報告し指示を仰ぐようにする。何年の経験があっても、自己判断がしづらい所がある」³という意見が見られた。また、日本では、「知識と現場のギャッ

プ」という新人保育者に多く見られるストレス源があるが、この点はストレス要因として中国では提出されていない。日本の「能力の未開発」は、「自分がやりたい研究を思い通りにできない」または「教材研究の不足」などと解釈されるが、同様に中国でも仕事能力の向上を求めるところがある。しかし、中国の場合は、職務に対する予想と現実のギャップ、昇進しにくいこと、仕事によって社会貢献・自己実現しにくいことなど、日本とは異なる視点が提示される。そのほか、「社会地位の低さ」はどちらの国でも見られたが、これは微かな差別を保育者が感じていることの表れであろう。特に、中国の場合、近年、幼稚園内での教諭による虐待事件の報道が増えたことにより、幼稚園は世間から不信の目に晒されており、総体的にイメージは悪化している。それを反映したものとして、本調査の自由記述欄でも以下のような記述がみられる。

「マスコミは教諭に関するマイナスの事件ばかりを報道している。教諭としてのつらさはあまり伝えられず、社会は保育者の仕事を理解してくれず、保育者のイメージも悪くなっている。これから、教諭になりたいと思う若者はさらに減少する可能性があり、人手不足の問題はもっと深刻になっていくでしょう。ですから、マスコミは肯定的な話も報道してほしい」。

こうした世間の厳しい目は、教諭のストレス要因の一つでもある。

また、日本・中国の共通点として、両国の教諭とも周囲からの支援不足を感じているが、日本の場合は社会や地域からの支援不足が主であり、中国の方は主に教諭自身の家族から十分な支持を得られず仕事と家庭の両立が達成しにくい点に主眼が置かれているなど、内容は少し異なる。

4. 日中の幼稚園教諭のストレス比較

まずは、日中両国で幼稚園教諭のストレスはどのような要素と関係しているのかを知るために、「人間関係」や「仕事の量と時間」「仕事満足感」「給料待遇」など教諭のストレス要因となり得る12項目⁴について因子分析を行ったところ、日本、中国とも3つの因子を抽出することができた（表2、表3を参照）。

日本で抽出された3因子は、以下の通りである。まず第1因子は、「今の仕事の幸福感は高い」「保護者とうまく連絡を取れている」「ほかのスタッフと一緒に仲良く仕事している」といった仕事に対する好感度の項目と、「今の仕事が好きで、何年も続けたい」などやる気に関する項目で構成されていることから、「仕事のやりやすさ」と命名した。第2因子は、「今の給料に満足している」「職場環境に満足している」など満足感に関する項

目や、「仕事で、人手不足と覚えることはある」（逆転項目）で構成されていることから「仕事の満足度」と命名した。第3因子は、「現在の仕事時間、どう思うか」⁵ 「延長保育などにより、残業がある」など多忙感を訴えるものであることから、「仕事時間の長さ」と命名した。

表2 日本の幼稚園教諭のストレス要因の因子分析

	因子1	因子2	因子3
第1因子「仕事のやりやすさ」			
今の仕事の幸福感は高い	.892	.011	.054
仕事の達成感が高い	.819	-.106	.081
今の仕事が好きで、何年も続けたい	.759	.023	-.084
保護者とうまく連絡を取れている	.647	-.205	-.028
ほかのスタッフと一緒に仲良く仕事している	.540	.146	.014
※転職できるなら他の仕事（幼稚園教諭、保育士ではない仕事）に転職したい	-.385	-.239	.077
第2因子「仕事の満足度」			
いまの給料に満足している	-.081	.855	.009
※仕事で人手不足と覚えることがある	.170	-.628	-.065
いまの職場環境に満足している	.224	.621	-.042
現在、世話をしている子どもの人数についてどう思うか	-.098	-.222	.128
第3因子「仕事時間の長さ」			
現在の仕事時間についてどう思うか	.018	.018	.870
延長保育などにより残業があるか	.021	.035	.595
寄与率 (%)	36.74	7.11	4.36

(最尤法、プロマックス回転)

因子相関行列	因子1	因子2	因子3
因子1	1.000	.666	-.525
因子2	.666	1.000	-.617
因子3	-.525	-.617	1.000

次に、中国の因子分析の結果をみると（表3）、中国の第1因子の項目も日本の第1因子「仕事のしやすさ」と類似するが（仕事の幸福感、同僚関係の良好さ等）、ただし、同僚との関係は含まれない。そこで、「仕事のやりやすさと満足感」と命名した。第2因子は「延長保育などにより残業がある」などの仕事の多さと仕事時間の長さを訴える項目と、「いまの給料に満足しているか」（逆転項目）など苦勞の報われなさを訴える項目で構成されることから「仕事条件の不満」と命名した。第3因子は、「同僚と仲良く仕事をしているか」「人手不

足」「もし転職できるならば、他の仕事に転職したい」で構成されることから「人手不足に対する不満」と命名した。

これらの結果から、日本と中国の幼稚園教諭のストレス因子は異なることが考えられる。日本の場合は、「仕事のやりやすさ」「仕事に対する満足感」「仕事時間の長さ」がストレスと関連がある可能性があり、中国では、「仕事のやりやすさと満足感」、仕事に見合う給料が支払われないこと、「人手不足の不満」がストレスと関連する因子隣りうる。

表3 中国の幼稚園教諭のストレス要因の因子分析

	因子1	因子2	因子3
第1因子「仕事のやりやすさと満足感」			
今の仕事が好きで、何年も続けたい	.863	.048	-.172
今の仕事の幸福感は高い	.808	-.116	.076
仕事の達成感が高い	.715	.111	.033
保護者とうまく連絡を取れている	.515	.043	.312
いまの職場環境に満足している	.355	-.231	-.133
第2因子「仕事条件の不満」			
現在の仕事時間についてどう思うか	.100	.921	-.112
現在、世話をしている子どもの人数についてどう思うか	.074	.596	-.035
延長保育などにより残業があるか	-.052	.507	.118
※いまの給料に満足している	.170	-.310	-.255
第3因子「人手不足に対する不満」			
仕事で人手不足と感ずることがある	.005	-.033	.555
ほかのスタッフと一緒に仲良く仕事している	.305	-.028	.506
転職できるならば他の仕事（幼稚園教諭、保育士ではない仕事）に転職したい	-.094	.124	.395
寄与率（%）	23.33	13.97	5.56

(最尤法、プロマックス回転)			
因子相関行列	因子1	因子2	因子3
因子1	1.000	-.307	.191
因子2	-.307	1.000	.297
因子3	.191	.297	1.000

4.2 ストレスと虐待的養育態度についての分析

次に、日本と中国の幼稚園教諭が「不適切な養育方法」（5項目）についてどのように考えているかについて比較分析を行った（表4）。その結果、いずれも日本の教諭の方が、中国の教諭よりも「不適切な養育方法」について「絶対だめ」と答える割合が高いことがわかった。先述した本調査の対象者属性をみると、日本に比べて中国の幼稚園教諭は学歴が低く、幼稚園教諭の免許をもたない比率が高かった。中国の教諭の「不適切な養育方法」に対する意識が低いのは、教諭の資質と相関があることを示唆しているのではないだろうか。

また、教諭のストレスは、こうした不適切な養育態度への意識にも影響を及ぼすことが考えられる。そこで本調査では、先に因子分析でみた12項目をストレス変数として、その合計点からストレスの高位群、中間群、低位群の3つに分類し、それと不適切な養育態度との関連について考察を行った（表5-1、5-2）。その結果、日本の調査では「言うことを聞かない子どもに、わがままを言わないで言う通りにしなさいと大きな声で厳しく叱る」という1つの項目だけ有意差がみられた。反対に、中国

ではそれ以外の4項目において、ストレスが高いほど不適切な養育態度を許容する関係が見られた。

この結果から、特に中国において教諭のストレスを軽減することは、不適切な養育を軽減するために必要な措置であることが指摘できるだろう。陳・熊（2019）は、264名の保育者による子ども虐待事件を分析するなかで、虐待の目的と動機として最も多く見られたのが「ストレスの解消のため」（57.2%）であり、あるいは「楽しむため」（30.1%）という回答が多数を占めていることを明らかにしている⁶。彼らは、ストレスは心的な健康を阻害するだけでなく、子どもへの虐待の原因・背景にもなっていることを指摘しており、この指摘は本調査の結果とも類似するだろう。ところで、中国に比べて、日本の幼稚園ではストレス程度が養育態度へ及ぼす影響が小さいことがうかがえたが、そこから、ストレス以外の何らかの要因がより強く不適切な養育態度に影響する可能性が示唆される。

いずれの国においても、虐待の発生率を抑えたい場合、ストレスの軽減のほかに、人間関係や仕事環境などの改善などにも注視が必要であろう。

表4 不適切な養育方法に対する見方の日中比較 (%)

		絶対 だめ	場合によ っては 仕方ない	そうい う方法 もある	構わ ない	
言うことを聞かない子どもに「わがままを言わないで、言う通りにしなさい」と大きな声で厳しく叱る	日本	63.7	26.2	9.9	0.3	$\chi^2=43.81$ df=3, p=.000
	中国	36.7	40.0	19.5	3.8	
子どもを静かにするために「うるさいから黙って」と命令をする	日本	75.2	20.6	4.2	0.0	$\chi^2=130.97$ df=3, p=.000
	中国	33.5	23.2	15.8	1.8	
子どもの手を叩いて、子どもを注意する	日本	81.7	15.0	3.3	0.0	$\chi^2=24.66$ df=3, p=.000
	中国	73.3	12.9	9.5	4.3	
悪いことをする子どもを外に立たせて反省させる	日本	77.2	18.3	4.5	0.0	$\chi^2=38.35$ df=3, p=.000
	中国	54.3	33.8	8.1	3.8	
癩癩もちの子どもは泣き止むまで放っておく	日本	42.6	39.9	17.5	0.0	$\chi^2=39.61$ df=3, p=.000
	中国	39.0	27.1	24.8	9.0	

表5-1 ストレス程度と不適切な養育態度 (日本) (%)

ストレス程度		「絶対だめ」と答えた教諭の割合				
		子供を大声で 厳しく叱る**	子供に黙るよう 命令する	子供の手を叩 いて注意する	子供を外に立た せて反省させる	癩癩もちの子供 を放置する
日本	高位群	50.0	71.1	81.1	67.4	31.1
	中間群	59.0	75.0	76.0	78.0	43.0
	低位群	73.2	77.2	85.4	81.3	51.6

$\chi^2=15.35$, df=6, p=.018
 $\chi^2=7.71$, df=4, p=.103
 $\chi^2=6.44$, df=4, p=.168
 $\chi^2=5.91$, df=4, p=.206
 $\chi^2=8.99$, df=4, p=.061

表5-2 ストレス程度と不適切な養育態度 (中国) (%)

ストレス程度		「絶対だめ」と答えた教諭の割合				
		子供を大声で 厳しく叱る	子供に黙るよう 命令する***	子供の手を叩い て注意する**	子供を外に立たせ て反省させる**	癩癩もちの子供を 放置する***
中国	高位群	37.2	27.3	71.8	56.4	35.9
	中間群	28.6	28.6	63.5	50.8	33.3
	低位群	39.3	49.2	82.0	59.0	50.8

$\chi^2=7.81$, df=6, p=.252
 $\chi^2=19.42$, df=6, p=.003
 $\chi^2=14.92$, df=6, p=.021
 $\chi^2=12.90$, df=6, p=.045
 $\chi^2=22.82$, df=6, p=.001

5 まとめと課題

5.1 調査結果の概要

以上のように、本調査では、日本・中国とも幼稚園教諭のストレスが高いことが明らかになった。先行研究では、日本特有のストレスは「園の方針とのズレ」

「知識と現場のギャップ」「能力の未開発」「周りからの支援不足」などが指摘されており、一方、中国特有のストレスとしては「職務評価」「個人価値の職業希望」「世論からの偏見」などがあげられてきた。国によって何がストレス要因となるかは異なることは本研究

でもみられ、また、中国とは異なり、日本では仕事のしやすさに同僚関係が含まれていることも特徴的であった。

次に、ストレス程度（高位/中間/低位群）と「不適切な養育態度」との関連について探ったところ、以下の点が明らかになった。まず、①中国の教諭は日本の教諭よりも、学歴・免許取得率が低く、また不適切な養育方法に対する意識も低かった。不適切な養育や虐待的行為は、教諭の資質と強く関連していることは想像しやすく、中国でも教諭免許取得率の増加とそのためトレーニング期間（学歴）も必要であろう。それとともに、②ストレスが子ども虐待発生リスクに繋がると想定し、ストレス程度と不適切な養育態度への許容度について比較分析を行った結果、日本よりも中国においてその傾向がみられた。

これら結果を踏まえて、最後に、幼稚園内の虐待事件や不適切な養育態度をおさえる方策の一つとして、大きく二つの方向からストレスの軽減について考えたい。一つは幼稚園教諭自身の感情のコントロールであり、ストレスを受けている主体者が自分の情動を変化させることによってストレスを軽減する方法である。Kobasa（1979）はハーディネスをもつことでストレスに立ち向かい健康を維持できると提唱し、あるいは、田中（1999）が保育者効力感は精神的健康を維持する要因となりうることを指摘するなど、感情のコントロールはストレス解消に有効である。

もう一つは、外在的なストレス要因自体を除去して問題解決を図る方略である。本調査でも、自由回答欄でみる教諭の訴えとして、日本では「休日でも出勤させる」、「パワハラに遭っている」、「子ども受け入れ体制が不合理」、「園内研修の時間がにくい」、「外部研修へ希望者全員を行かせることに難しい」、「幼稚園でもスクールカウンセラーのような方が言って欲しい」など多くの苦しさあげられていた。しかし、これは個人の心の持ちようでは解消できないストレス要因である。今後は、幼稚園教諭へ面接調査を行うなどしてその本音を聞きだし、相談体制づくりまで取組む努力が必要であろう。あるいは、教諭の効力感を高めるためにも、過度な負担にならない研究・研修のシステムを備える必要もある。

また、「パートとして正社員と同じに働いているが、給料の差が大きい」、「高齢教諭の雇用を積極的にしてもらいたい」「保育士がもらえる手当を教諭にも設置してほしい」といった雇用条件の改善要求も多く見られた。特に、人手不足に対する不満は大きく、「国がその解消をしようと何かしらのアクションを起こしていない。免許を持っているけど現場に戻ってこれない理由を国として考えてほしい」、「待機児童が多いわりに保育者の給料が安い。無償化をするのは保護者にとって良い

が、質がさがってしまうのでは…」、「無償化は教育にとって本当にプラスになるのだろうか。現場を知った上で、国会で決められたのか疑問である」など、幼児教育無償化がはじまることに対する不安や、国の政策に疑問を呈する声も多くみられた。それゆえ、国と現場の教諭の間に互いの相談・支援システムを一刻も早く設置する必要があるだろう。

一方、中国では、「職務評価の不平」「昇進できない」「能力によって給料をもらいたい」などの記述がみられる。幼稚園教諭の人手不足で困っている中国では、現在、学歴が低いからといって教諭として受け入れられない幼稚園はあまりみられない。けれども、中国の保育制度は、学歴が高い者が昇進するシステムとなっており、給料もより高い。1990年代以降、保育機関でも格付け制度が導入され、教諭は小・中学校の教師と同じように「職級制」⁷を実施するようになった。つまり、政策上は、学歴の向上へ積極的に取り組んでいると見られる。また、論文の発表数、公開講義、出勤数、試合回数、上司と同僚の相互評価など園によって異なる評価システムを採用しているが、それによって給料が上がったり下がったりするため、教諭は子どもの教育・養育だけに専念できず、職級の昇進や職務での高い評価を追求しないとイケない。王（2015）の調査でも、57.2%の教諭は職務評価によってストレスを感じると認めている。そのなかで、特に学歴の低い教諭は、より難しい昇進に向けて、職務の高評価を無理に追求してもなかなか給料が上がらず、ストレスを強く感じるようになると予想する。政府と園は学歴ではなくより公平な評価制度に改善すべきだろう。能力に応じて給料をもらうことと個人的価値の職業希望の実現を保障できるシステムの再検討が必要になる。

ところで、日中両国の教諭とも、幼稚園の仕事に対する保護者の不理解や、社会的地位の低さを感じていた。特に、中国では、偏見や厳しい目が向けられており、それもまたストレス要因の一つになっている。マスコミは強い影響力をもっているがゆえに、適切な報道によって保護者の理解や社会的地位の改善、また、地域や社会の支持を得られると考える。そのほかにも、共通点として「仕事量の多さや時間の長さ」「職場環境と給料待遇の不満」があったが、これについては、たとえば職場環境の改善、園の方針の改革など力を入れることなどが考えられるが、その場合も一度の改善ではなく、その有効性を繰り返し検証する必要がある。

5.2 今後の課題

今後の課題としては、調査地域を拡大しながら、ストレス軽減に関する対処方略の有効性の検証や、丁寧なインタビュー調査による幼稚園教諭のストレス源とその軽減に必要な改善案の提出がある。

また、「幼稚園における虐待防止」研究を進めるためにも、ストレス要因以外の項目（たとえば、「仕事能力」「社会的地位の低さ」「児童への対応の複雑さ」など）について検討の余地が残った。あるいは、本調査では、中国よりも日本の方がストレスと虐待リスクの関連が弱いことが判明したが、その理由まではわからなかった。これらのことから、今後は、調査対象を拡大し、質問項目を広げて、また丁寧な聞き取り調査をあわせた実証研究を蓄積していくことが課題であろうと考える。

〈注〉

1. 本調査・自由記述より
2. 文部科学省中央教育審議会－初等中等教育分科会－教育課程部会－幼稚園教育専門部会（第7回）議事録・配付資料（6）
3. 本調査・自由記述より
4. 質問項目は以下の通りである。
 - ①ほかのスタッフと一緒に仲良く仕事していると思いますか
 - ②仕事で、人手不足と感じることはありますか
 - ③仕事の達成感が高いですか
 - ④今の仕事が好きで、何年も続けたいと思いますか
 - ⑤今の仕事の幸福感は高いですか
 - ⑥保護者とうまく連絡を取れていると思いますか
 - ⑦もし転職できるならば他の仕事（幼稚園教諭、保育士ではない仕事）に転職したいと思いますか
 - ⑧現在の仕事時間について、どう思いますか
 - ⑨現在世話をしている子どもの人数についてどう思いますか
 - ⑩延長保育などにより、残業がありますか。
 - ⑪あなたは、いまの職場環境に満足していますか
 - ⑫あなたは、いまの給料に満足しています
5. 回答の選択肢は「①ちょうどいい ②まだ余裕がある ③ちょっと疲れる ④疲れる ⑤長すぎる」
6. 動機は複数の場合がある。ただし、事件の統計的分析だけは偶然性が介入したり、詳細な説明に欠くため、より丁寧な検証も必要であろう。
7. 「職級制」とは、教諭は職務称号評定を申し込みによって、3級教師、2級教師、1級教師、高級教師、正高級教師の称号をもらうことを指す。評定の必要条件は学歴要件と下級職務の在職年数などがある。称号によって給与が異なる。

〈参考文献〉

- ・武小燕 2015-03「日中の保育者の生活環境と労働環境に関する比較研究」『子ども学研究論集』（7），pp.1-12

- ・池田幸代・大川 一郎 2012「保育士・幼稚園教諭のストレスが職務に対する精神状態に及ぼす影響：保育者の職務や職場環境に対する認識を媒介変数として」『発達心理学研究』23（1），pp.23-35
- ・金城悟 2017「労働安全衛生法に基づく厚生労働省ストレスチェックによる保育者のストレス構造」『東京家政大学博物館紀要』22，pp.91-101
- ・藤後悦子・日向野智子・山極和佳・角山剛 2019「女性保育者の職場ハラスメントとストレス—保育士と幼稚園教諭の比較—」『ストレス科学研究』
- ・黒谷万美子・林蘇杭 2016「保育者におけるメンタルヘルスの日中比較」『愛知学泉大学・短期大学紀要』51，pp.53-60
- ・松村朋子 2016「保育者のストレスに関する文献レビュー」『大阪総合保育大学紀要』（10），pp.203-214
- ・村田務 1996「保育者のストレス状況とその要因（人文・社会科学篇）」『白梅学園短期大学紀要』32，pp.135-147
- ・西坂小百合 2002「幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス，ハーディネス，保育者効力感の影響」『教育心理学研究』50（3），pp.283-290
- ・齋藤恵美・田中紀衣・村松公美子 [他] 2009「保育従事者のバーンアウトとストレス・コーピングについて」『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』（3），pp.23-29
- ・宇佐美尋子・西智子・高尾公矢 2015「保育者のストレスに関する研究：女性企業従業員との比較検討」『Bulletin of Seitoku University, bulletin of Seitoku University Junior College』26，pp.1-7
- ・陈伟熊波 2019「幼师虐童的生成机理与犯罪防控模式—基于264起幼师虐童案的实证分析」『山东大学学报』（哲学社会科学版）pp.55-64
- ・佳琦 2019「幼儿教师职业压力来源与应对办法」『教育理论与实践』第39卷第11期，pp.41-42
- ・饶淑园・王红椿 2009「珠三角地区幼儿教师职业压力调查报告」『教学与管理』2
- ・孙彩霞・王丽媛2018，「虐童事件的心理学反思」『中国青年社会科学 特别观察』第37卷总第195期，pp.41-46
- ・王萍・曹蕊・秦姜艳2015「幼儿园教师职业压力来源及其应对策略」『学前教育研究』第4期
- ・王延伟 2006「幼儿教师职业压力及其影响因素研究」西南大学硕士学位论文

※本研究はJSPS KAKENHI Grant Number 19K02528の助成を受けたものです。